



TITLE:

シスモンディとマルサスの経済発展理論

AUTHOR(S):

堂目, 卓生

CITATION:

堂目, 卓生. シスモンディとマルサスの経済発展理論. 経済論叢 1989, 143(2-3): 130-149

ISSUE DATE:

1989-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/134290>

RIGHT:

經濟論叢

第143卷 第2・3号

「ナント勅令」廃止にいたる立法措置……………	木 崎 喜代治	1
近代世界における農業経営，土地所有と 土地改革 (2)……………	中 村 哲	17
シスモンディとマルサスの経済発展理論……………	堂 目 卓 生	28
産業革命期イギリスにおける スピナーナムランド制度の展開 (2)……………	廣 重 準四郎	48
産業革命期イギリスのアジア進出と 東インド会社の位置 (1)……………	今 田 秀 作	61
高橋財政下における地方財政の 再編成 (1)……………	藤 田 安 一	87

平成元年2・3月

京都大學經濟學會

シスモンディとマルサスの経済発展理論

堂 目 卓 生

I 序 論

シスモンディとマルサスは、各々19世紀初頭のジュネーブと英国における過少消費説者あるいはリカード経済学の批判者として並び称せられる。彼らのリカード経済学に対する批判は、全般的供給過剰の可能性を否定する点、そして経済発展がもっぱら倹約と技術進歩によって促進されると考える点に向けられた。彼らはともに、経済発展における需要の重要性あるいは生産と消費のバランスの必要性を強調したのであった。両者の過少消費説は、各々マルクスの恐慌論、ケインズの有効需要論の先駆的な業績として評価され、検討されてきた¹⁾。しかしながら、彼らの議論は、彼らが支援する社会階級の違いによって捉えられることが多く、理論的に比較検討されることはほとんどなかった²⁾。シスモンディは彼の主著『経済学新原理』（以下『新原理』とする）の一章をマルサスの人口法則批判にあてている。一方、マルサスも主著『経済学原理』において、次のようにシスモンディの経済学の多くの部分に同調できないことを

1) シスモンディに関するマルクス自身の論評については、Marx [18], [19], [20] などを見よ。マルクスによるシスモンディの解釈は、その後レーニンやナロードニキなどによって受け継がれるが、この系統におけるシスモンディの恐慌論研究の総括としては、Luxemburg [14] が参照されるべきである。吉田 [40] は、レーニンのシスモンディ解釈、マルクスのシスモンディ解釈、そしてシスモンディ自身の議論を比較する。マルクスのフィルターを取り払った最近のシスモンディ研究としては、Arena [1], Lutfalla [13], Parguez [24], Sowell [32] [33], 堂目 [37] などが挙げられる。本稿も、この範疇に属する研究である。

一方、マルサスに関するケインズ自身の称賛は、Keynes [9] に見られる通りである。このようなケインズのマルサス評価を受け継ぐ最近の研究として、Costabile and Rowthorn [2], Ellis [5], Paglin [22], 人村 [36], 堂目 [36] などがある。しかしながら、ケインズの称賛をマルサスに対する過大評価とし、マルサス経済学の非ケインズ的側面を明す研究として、Corry [3] [4], Hollander [7] [8], Link [12], Meek [21] などが挙げられる。

2) 過少消費者としてのシスモンディとマルサスの比較は、Meek [21] に見られる。

表明する。

「消費および需要に関するシスモンディ氏の諸原理の多くに私は全く同調する。しかし消費および需要のいっさいの増大がそれに依存するところの、国民所得の形成に関して、彼が採る見解が正しいとは、私は思わない。そして私は、機械に関して彼が抱いている懸念にはけっして同調しえないし、また競争の諸影響から個人や階級を保護するために、政府側でおこなう頻頻とした干渉に関して彼が抱く見解にはいっそう同調しえない。人口に関しては、彼は、この有能かつ優れた論者に期待しうる以上に、私の著作を誤解している。」³⁾

シスモンディとマルサスは、人口の増加に関してのみならず、機械の導入、政府の介入に関しても、異質の議論を展開したことが伺われる。さらに、彼らは、販路説に関しても、リカード経済学の論敵として共同戦線を張ることもなく、お互いに一定の距離を置いたのであった。販路説批判を含む彼らの議論は、これまで解釈されてきたよりも根本的に異なっているように思われる。

本稿の目的は、シスモンディとマルサスの議論の違いを、人口成長、機械化、生産と消費のバランスなど、経済発展に深く関わる問題を中心に検討することにある。それによって、当時のヨーロッパにおける急激な経済発展を彼らがどう捉えていたかが、より明白になるであろう。次節では、まずマルサスの人口法則とシスモンディの批判が検討される。そこでは、シスモンディが批判するように、マルサスは相対的人口過剰を本当に取り扱っていなかったかどうか、そしてシスモンディの批判の根拠は何であったかが論点となる。第3節では、相対的人口過剰に関連して、労働を節約する新式機械の導入が労働需要に与える影響に関して二人の議論が検討される。さらに第4節では、機械化や労働需要に関わるより根本的な問題として、経済発展における需要の役割についての彼らの理論的枠組が明らかにされ、その相違が強調される。そして第5節では、結論として、シスモンディとマルサスの理論の相違がどのような見解の相違に

3) Malthus [17], 初版, p. 421.

よってもたらされるのかが検討され、二人の学説史上の新しい位置づけが試みられる。

II シスモンディの人口法則批判

シスモンディは、『新原理』第7編第3章「人口を制限するものは土地が産出できる生活資料の量ではない」において、マルサスの人口法則を批判した。マルサスの人口法則は〈図1〉によって次のように説明される。〈図1〉において、 n は人口成長率を、 w は人口一人当たりが得ることが可能な食物の量を、そして NN 線は n が w から受ける影響の仕方を示すものとする。マルサスによれば、人口は、食糧に制限がなければ25年間で2倍、すなわち約2.8%の年成長率で増加する。従って、 NN 線は図で示されるように、 w がある水準を越えたところから水平になる。マルサスはここで、人口成長を規制する原理として、「人口が幾何級数的に増加するのに対し、食糧は算術級数的にしか増加しない」という命題を唱える⁴⁾。食糧生産における収穫逡減と不変の生産技術を仮定すれば、食糧の増加が人口の増加に追いつかないことは真実である⁵⁾。そのよう

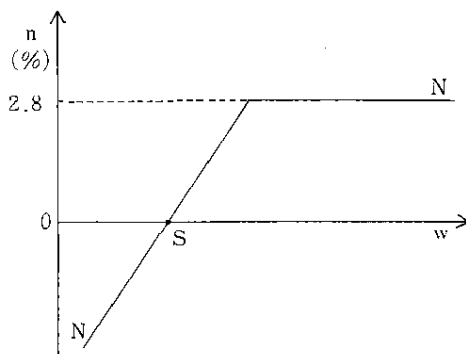


図 1

4) Malthus [15], 初版, p. 14.

な仮定のもとで人口成長率が正である場合には、人口一人当たりが得ることが可能な食物の量 w は、時間とともに減少し、 w によって規制を受ける人口成長率 n も低下する。そして究極的に到達する状態は点 S で示されるような定常状態である。人口成長率が負であるときには、ちょうど反対の過程が機能するので定常状態は安定的であると言える。

シスモンディは、マルサスの人口に関する命題を次のように批判する。

「彼（マルサス）は、抽象的に語り、その環境に注意を払わないで、人口の可能的な増大を、限られた場所で、常により不利となってゆく環境における動植物の絶対的な増大と対置させている。この両者の比較は、決してこのようにおこなわれるべきものではない。」⁶⁾

シスモンディの批判点は二つある。まずシスモンディは、抽象的に考えても、植物や動物の増加は人口の増加よりも遅いということが一般的に成り立つ命題ではなく、むしろそれらは人口よりも速く増加するであろうと考える。シスモンディはリカードとマルサスが共有し、彼らの経済学の基礎を成す収獲逡減の法則を退ける。彼のこの態度は『新原理』を通して一貫しており、リカードの差額地代説そして地代に課せられる租税の転嫁説を批判するときの理論的根拠となる⁷⁾。シスモンディが生産一般に関して想定するのは、むしろ社会的分業の効果を考慮に入れた収獲逡増であったといえる⁸⁾。

第二にシスモンディは、マルサスによる人間および動植物の繁殖力が架空のものにすぎず、実際の人間の意志や生産形態を反映したものではないと批判する。シスモンディは反例として、フランスの富者層および貴族層の人口が莫大

5) 例えば、食物生産部門の労働者数を N 、生産関数を $f(N)$ によって示すならば、収獲逡減の性質は、 $f'(N) > 0$ 、 $f(N) - f'(N) \cdot N > 0$ によって表わされるであろう。したがって、 $df(N)/dN < f(N)/N$ 、故に、 $df(N)/f(N) < dN/N$ となり、食物生産の増加率がその部門の労働増加率にすら及ばないことがわかる。

6) Sismondi [27], 初版, Vol. II, pp. 268-269.

7) リカードの地代論に対するシスモンディの批判は、『新原理』第3編第12章（第2版では第13章）「リカード氏の地代論」, *Ibid.*, Vol. I, pp. 275-288に見られる。また租税の転嫁問題に関しては, *Ibid.*, Vol. II, p. 183 および pp. 215-220 を見よ。

8) *Ibid.*, Vol. I, pp. 365-384.

な財産とともに無制限に増加するどころか断絶を繰り返してきた事実をあげる。彼は、マルサスの人口法則は少なくとも裕福な地主階級や資本家階級にはあてはまらないと考える⁹⁾。〈図1〉を用いるならば、縦軸の変数 n は一般的な人口成長率ではなく、労働人口成長率と見直さなくてはならないということになる。さらにシスモンディは、労働人口は入手可能な食糧に依存するのではなく、実際の労働需要に影響を受けると考える。彼は、『新原理』第7編第4章「一国民にとって、いかなる人口の増加が望ましいか」において、次のように述べる。

「究極においては、人口は常に労働の需要に比例する。労働が必要され、それに十分な賃金が支払われるときにはいつも、それを得るために労働者は生まれてくるであろう。…このように国民的福祉は労働の需要に関わっているのであるが、それは規則的にして永続的な需要に対してである。」¹⁰⁾シスモンディによれば、〈図1〉における横軸の変数 w は生産可能な労働者一人当たりの食糧ではなく、実際に労働者が受け取る一人当たり所得として見直さなくてはならない。シスモンディの関心は、従って、雇用および所得分配の問題に向けられる。そして、規則的な労働需要を維持するために検討しなくてはならない最も重要な問題として、生産と消費のバランスを主張したのである¹¹⁾。

このような、シスモンディの人口法則に関する批判をマルサスはどのように受けとめていたであろうか。彼は『経済学原理』の中で次のように述べる。

「彼（シスモンディ）は、…私の著作を誤解している。彼は、私が人口の可能な（virtual）増加を食物の現実の（positive）増加と比較しているゆえに、私の推論は全く詭弁を弄するものだ、という。私はたしかに、人口の可能な増加を食物の可能な増加に比較し、また人口の現実の増加を食

9) *Ibid.*, Vol. II, pp. 272-273.

10) *Ibid.*, Vol. II, pp. 284-285.

11) シスモンディは『新原理』の目的を次のように述べる。

「私は、全体の所得の決定によって、あるいはまた、国民に最大の幸福をひろめ、その結果この学問の目的を最もよく達成させる所得分配の研究によって、経済学を新しい基礎に置いたと信ずる。」(Sismondi [27], 第2版, Vol. I, p. 56.)

物の現実の増加に比較したのである。そして私の著書の大部分は、後者に
あてられている。]¹²⁾

シスモンディのマルサス批判は『人口論』の初版に基づいておこなわれたので
あるが、われわれはそこで、実際の労働人口の成長を規制するのは労働需要と
実質賃金であるというマルサスの叙述をいくつか見ることができる。例えば、
労働人口の増加が大きい時には、

「...労働者の数は、仕事の数よりも多くなり、従って賃金は下落し、一方、
穀物価格は騰貴するので、労働者は以前よりも懸命に働かなくてはならな
くなる。このような状況が人々の結婚願望をくじき、人口はそれ以上増え
なくなる。一方、低い賃金、豊富な労働力、産業拡大の社会的必要性が、
資本家をしてより多くの労働者を雇わせる。このような雇用拡大、従って
生産拡大は、人口と食糧の割合がもとの水準に戻るまで続き、労働者の生
活は回復し、人口抑制も幾分弱められるであろう。このように幸福に対す
る前進・後退運動が繰り返されるのである。]¹³⁾

マルサスの人口成長に関するこのような取り扱い、『人口論』の版を重ねて
いくとともにより明確になる。そして『経済学原理』の重要な課題の一つは、
収穫逡減による食物獲得の困難さの増大を考慮に入れなかった場合において、
資本（労働需要）および人口（労働供給）の実際の変動が何によって規制され
るか、という問題であった¹⁴⁾。彼がそこで引き出した結論は、資本家の蓄積意
欲を損なわないような利潤率を保証する有効需要と適正な生産的消費の維持
であった。

マルサスが、労働人口の変動を雇用量と所得分配に関連づけて考えたことは

12) Malthus [17], 初版, p. 421. (下線は筆者によるものである。)

13) Malthus [15], 初版, p. 30-31.

14) マルサスは、収穫逡減の法則によって利潤が影響を受ける原理を「利潤の制限原理」(limiting principle of profits)と呼び、利潤が資本と労働の比率によって影響を受ける原理を「利潤の規制原理」(regulating principle of profits)と呼んだ。『経済学原理』の特徴は、後者を短期的な利潤変動の原因として重視し、そこから有効需要論を展開した点にある。ただし、大村[36]は、マルサスの有効需要論による利潤変動の説明と規制原理によるそれとは、全く別のものとして解釈されるべきであると考える。

明らかであり、引き出した結論は、シスモンディのものと非常に近いものに見える¹⁵⁾。ではシスモンディのマルサス批判は単なる誤解に基づいていたのであろうか。シスモンディは、1820年の生産と消費のバランスに関する論文の中で、『新原理』における自分の批判があくまでも『人口論』の初版に基づいたものであり、その後の諸版に基づいたものでなかったことに対して遺憾の意を表している¹⁶⁾。マルサスも1821年3月のシスモンディに宛た手紙の中でシスモンディの批判の由来を理解したことを示した¹⁷⁾。しかしながら、シスモンディは1827年に出版された『新原理』第2版において再び次のように述べる。

「彼（マルサス）が増補し、修正し、訂正し、相次いで五版を重ねたその著書（『人口論』）は、彼の影響を拡大して、受け容れ得る限りのあらゆる展開をその体系に与えた。しかし、その最も完成された状態ですら、この体系は、我々には正しいとは思われない。マルサス氏は、彼にとっては明白と思われた一つの命題に踏み留まっておられるが、それは卑俗なものにすぎず、彼は、それを検討することなく、彼の推理の基礎とし、その結果としてわれわれには危険と思われる誤謬に陥っている…」¹⁸⁾

シスモンディにとって、受け容れ難いマルサスの命題とは食糧の増加が人口の増加に追いつかないということであり、そこから導かれる誤謬とは、経済が長期的には定常状態になるという結論であった。マルサスが労働人口の成長を労働需要との関係で捉えたのは、あくまでも収穫逕減による効果が技術進歩によって打ち消されうる期間、従って労働人口と生産物の比率が不変である期間に関してである¹⁹⁾。この期間において考えなくてはならないのは、労働と資本の比率、生産と消費の比率、利潤と賃金の比率などである。しかしながら、よ

15) ケインズは、マルサスの経済学の中に、人口の悪魔 P と失業の悪魔 U を見い出す。Keynes [10] を見よ。

16) Sismondi [28], (邦訳 p. 108)

17) Sraffa [35], Vol. VIII, pp. 375-377.

18) Sismondi [27], 第2版, Vol II, p. 268.

19) マルサスは、収穫逕減の効力に関して次のように述べている。「この原理（利潤の制限原理）は、じつに『人口の原理』にも、また1815年に私が別に公にした地代理論にも、必然的に含まれているものである。しかし私は、この原因はその最終作用においてあらゆる他の原因を圧倒し、

り長期においては、収穫逡減の影響が確実に反映し、労働人口と生産物の比率自体が減少するのである。マルサスのこのような二段論法に対し、シスモンディはその根底にある命題に疑問を投げ掛けたのであった。資本制経済の特徴をアダム・スミスにならってむしろ収穫逡増に見、そこから生産過剰論を展開しようとするシスモンディにとって、収穫逡減の法則を経済発展理論の基礎とすることは受け容れがたいことであったかもしれない。さらにシスモンディの批判は、この法則の背後にある方法論にもむけられる。彼にとって収穫逡減の法則や人口法則は、自然法に基づいた調和主義的な発想から生まれた命題であり、それらは政治経済学の基礎とすることができない抽象的な命題であった。実際、マルサスやリカードの蓄積や地代などに関する調和的な経済諸理論は、これら二つの命題の上に成立していたと言ってもよい。シスモンディのマルサス批判は単なる誤解に基づくものではなく、英国の主流経済学派が共有した理論的基台に向けられたものである²⁰⁾。そして主流経済学派の内部にいたマルサスはその意義を認めることをしなかったのである。

このような根本的な思想の相違を持ちながら、シスモンディとマルサスの関心は、ともに労働需要が労働人口に及ぼす影響に向けられた。この問題を考える上で、彼らは、労働を節約する新式機械の導入によって労働需要がいかなる影響を受けるか、さらに生産物に対する需要が労働需要に対してどのような重要性を持つかについて検討した。そこでの彼らの議論にはどのような違いがあ

ゝ去るほど有力でかつ確実であるが、世界の实情では、その自然の進行は極端に緩慢であるだけでなく、資本の競争の原理に極めて大きな作用の余地を残して置くほどしばしば他の諸原因によって相殺されかつ克服されるので、過去またはこれから先百年間というある長さのどんな一時期においても、利潤は、耕作に引き入れられた最後の土地の自然的肥沃度よりは、資本の供給の相対的な過不足を引き起こした原因に、はるかにより多く依存するであろう、と主張するのが最も安全であることを理論的にも実証的にも示したいと思う。」(Malthus [17], 初版, p. 317.)

20) シスモンディは、『新原理』第二版の序文で次のように述べる。

「私の『新原理』は、……セイ、リカード、マルサス、マコロック諸氏の、経済学を今日いかにも才気に満ちたやり方で教えてきた学者たちとは、本質的に異なっているのである。これらの経済学者たちは、彼らの定理の連鎖における彼らに不都合な諸障害を絶えず捨象し、いささか識別困難であったものを識別しなかったために誤った結論に到達したように私には思われる。」(Sismondi [27], 第2版, 序文)

るだろうか。次節では、まず、労働需要に直接的な影響をもつ機械化に関して彼らの見解を比較しよう。

III 機械化に関するシスモンディとマルサスの見解²¹⁾

労働を機械に置き換えること、あるいは労働を節約する技術を体化した新式機械を導入することに関して、シスモンディとマルサスは、ともに慎重な態度をとる。

シスモンディは、労働節約的な技術の発見とその採用は、その産業部門の商品価格を低下させることによって、新たな需要を誘発することを認める。しかしながら、彼は、この新たな需要が、新技術の採用によって節約された労働者数に比例するものではないと考える。彼は、その理論的根拠を次のように述べる。

「すべての商品の価格は、それに要した労働に対する直接の割合で成立するのではなくて、この年労働と、高価な材料によって工場を建て機械を建造するためのものは更新されないまたしばしば疎遠な本源的労働と、最後に流動資本とから構成される割合から成立する。それゆえ、たとえ一台の機械でただ一人だけに生産させるために百人の労働者を罷免するとしても、決してその価格を百分の一に引き下げることはない。…これらの製造業は、労力を幾何級数的に省いたのに対して、その生産物の価格を算術級数的にしか低下させなかったのである。」²²⁾

このシスモンディの議論に対して、マカロックは、1821年の機械に関する論文の中で、一般に商品需要の増加率はその価格の低下率よりもはるかに大きいことが経験的に知られているとし、さらにたとえそのような需要の増加がないとしても、その産業から投げ出された資本と労働は潜在的な需要が多くある他の諸産業に投入されるであろうと論じた²³⁾。シスモンディも貿易相手国を含めた

21) 労働生産性の上昇が経済全体の雇用水準に与える影響についての、より体系的、理論的な分析は、堂目[39]において取り扱われる。

22) Sismondi [27], 初版, Vol. II, pp. 323-324.

23) McCulloch [22].

潜在的総消費需要が十分に存在するときには、ある部門での労働節約はその部門での労働需要を減らすけれども、その国の総雇用量と総生産量を増大するかもしれないと考えた。しかしながら、シスモンディは、消費には限度があり、その限度を越える生産は実行されえないであろうし、実行されれば経済は破綻する²⁴⁾。

一方、マルサスは労働節約の通常の効果について次のように述べる。

「労働節約のため、財貨を以前よりもはるかに低廉な比率で市場にもたらす機械が発明される場合に、もっとも普通の結果は、財貨がより多くの購買者の能力のおよぶ範囲内にもたらされうるから、新しい機械でつくった財総量の価値がそれ以前の価値を大いに越えるといったようにそれに対する需要が拡大することであって、そして労働の節約にもかかわらず、より少数の人手ではなく、より多くの人手がその製造のために必要とされるのである。」²⁵⁾

マルサスは、労働の節約はその商品の需要を増大し、その結果その部門の労働需要を以前よりも増加させるのが普通である²⁶⁾と考える。これは、シスモンディの考え方と全く反対である。しかしながらマルサスは、機械を応用した商品が価格の低下にもかかわらずその需要を増加できない場合もあることを認め、そのような場合、過剰な資本と労働は、他の産業に移転されるであろうと考えた。けれどもマルサスは次のように考える。

「しかし資本をある用途から引き上げ、それを他の用途に投下することには、いつも常に大きな損失がともなうであろう。かりに残りの全部が直接に用いられたとしても、それは額においてはより小さいのである。それはより多くの生産物を生み出すであろうけれども、しかしそれは以前と同じ分量の労働を支配しないであろう。そしてより多くの召し使いが使われなにかぎり、多くの人々が解雇されるであろう。」²⁶⁾

24) Sismondi [27], 初版, Vol. II, pp. 324-334.

25) Malthus [17], 初版, p. 402. (下線は筆者によるものである。)

26) *Ibid.*, p. 404.

マルサスの議論は、たとえ過剰となった資本が全て他の商品の生産に投下されても、地代や利潤などへの“漏れ”によって、解雇された労働者を全て生産的に再雇用することができず（故に、そこから生み出される総生産物の支配労働価値は以前よりも小さく）、以前の雇用水準を保つためには地主や資本家による不生産的労働者の雇用増加が必要である、と解釈できる。それは生産と分配の条件に依存する議論である。マルサスは一方で、以前と同じ商品を得るのに、より少ない労働を提供すればよくなった労働者は、より多くの商品を得るよりも怠惰を選択して労働供給を控えるため、商品全般に関する消費需要は機械化によって比例的には増加しないであろうと考える²⁷⁾。

労働を節約する新式機械の導入が労働需要に与える諸効果について、シスモンディとマルサスの議論には、幾つかの点で異なるけれども、二人がともに目を向けた問題は、生産拡大によって増大した商品が常にその販路を見い出すことができるかどうかということである。この問題は、機械化による生産拡大を販路説に関連させて、より動学的に分析することを要求する。そしてそれは、マクロ的には、経済発展において過剰な貯蓄はあり得ないかどうかという問題にもつながる。シスモンディとマルサスは、需要の要因を無視した過剰な貯蓄は経済発展を妨げると考え、リカード、セイの販路説に挑戦したのであった。しかしながら、シスモンディとマルサスの販路説批判の基礎には、決定的な違いがある。次節ではこの相違を討する。

IV シスモンディとマルサスの販路説批判²⁸⁾

シスモンディが『新原理』において議論した中心的な課題は、経済発展における生産と消費のバランスについてであり、このバランスを媒介する所得の役割の重要性であった。彼は、第4編第2章「消費による生産の、また所得による支出の相互決定」において、この問題をマクロ的に詳述した。シスモンディ

27) *Ibid.*, p. 405.

28) 筆者による、シスモンディの恐慌論およびマルサスの有効需要論に関する、より理論的、形式的な受け扱いは、各々、堂目、[37]、[38]に見ることができる。

はその中で、今年度の所得を今年度の生産物と同一視する販路説を批判する。彼は次のように述べる。

「今年の生産物に支払うことになるのは前年の所得である。将来の未定の労働量に尺度として役立つのは既定の量である。果てしない生産を刺激する人びとの誤謬は、彼らがこの過去の所得と将来の所得とを取り違えたことから生ずる。労働を増大させることそれは富を増大させることであり、富とともに所得を、所得とともに消費を増大させることである、と彼らは述べた。しかし、富は、需要のある労働、価格どおりに支払いを受けるであろう労働を増大させることによってのみ、増大するのである。そしてその価格は前もって決まっている。既存の所得がそれである。」²⁹⁾

シスモンディは、今年度の生産物を購入するのは前年度の生産物であり、故に、拡大再生産における供給過剰が不可避であると述べる。以来、シスモンディの恐慌論はこのような単純な形式によって解釈されることになる³⁰⁾。しかしながら、シスモンディは他の箇所で、利潤所得は過去の販路の成果に依存するけれども、労働者の前払い所得は現在に属すると述べ、所得の時間による二分を明確にする³¹⁾。従って、シスモンディの生産過剰論を従来どおり解釈するのは、あまりにも一面的であると言わなくてはならない。重要なのは、シスモンディが今年度の生産物と今年度の所得を同一視することなく、生産物を吸収すべき消費ファンドを形成する所得は、生産物とは独立に与えられると考えた点である。消費ファンドによって形成される今年度の総需要額と生産物が諸市場で遭遇するのであるが、その需要が「需要されたものに充分な報酬の提供を伴う」需要であるかどうかは、生産と消費のバランスに依存するのである。シスモンディは、儉約によってあまりにも急激に生産が拡大されるときには、これらの連鎖は崩れ、経済は発展するどころか破綻すると考える³²⁾。

29) Sismondi [27], 初版, Vol. I, pp. 120-121.

30) 後で見るように、マルサスもこのように解釈する一人であった。

31) *Ibid.*, Vol. I, p. 106.

32) *Ibid.*, Vol. I, p. 112.

マルサスもまた、経済発展における需要の役割を重視し、経済発展を最大にするような生産と消費の「中間点」が存在するはずであると考え³³⁾。しかしながら、彼は、販路説を上のような方法によって批判するシスモンディには決して同意しない。

「シスモンディ氏は、彼の最近の著作において、蓄積の限界を述べている。

『つまり人は、およそ年生産物の総体を前年の生産物の総体と交換するに過ぎない。』もしこれが事実であるとするならば、国民生産物の価値はどうして増大するだろうかを言うことは困難であろう。しかし、もし生産物が、それを獲得しかつ消費するために適当な犠牲を払うという願望を刺激するように、よく配分され、かつ社会の嗜好と欲求とにうまく適合されるならば、事実その大きな増大はただちに適当な市場を見出し、したがって交換価値を大いに増大させるであろう。いっさいの商品の増大はまず収入の増加としてあらわれてくる。そしてそれが正しく分配されかつ消費が供給に正しく比例したことによって価値においても分量においても増大するかがり、収入の年々の増大と支出および需要の年々の増大とが矛盾することなしに、年々の貯蓄がおこなわれることは、明らかなことである。』³⁴⁾

マルサスは明らかに、年生産物と年所得を同一視している。彼の場合、問題となるのは年所得と年支出が一致するかどうかということである。この問題は年所得のうち消費支出にあてられなかった部分すなわち貯蓄が、消費支出以外の支出すなわち投資に一致するかどうかという問題に還元して考えることができる。貨幣経済を想定するならば、貯蓄が投資を上回る場合、どこかで貨幣の退蔵がなされていると考えなければならない。しかしながら、マルサスは、ケインズと違って、貨幣の退蔵を説明する合理的な原理をもっていなかった。さらに、多くのマルサス研究者は、マルサスが投資されない貯蓄の存在さえ認めておらず、彼の過少消費説は販路説の批判とはならないことを指摘する³⁵⁾。け

33) Malthus [17], 初版, pp. 8-9.

34) *Ibid.*, pp. 420-421. (下線は筆者によるものである。)

35) Corry [3] [4], Hollander [7] [8], Link [12], Robbins [25] [26] などを見よ。

れども、マルサスは、1820年のリカード宛の手紙の中でセイが投資されない貯蓄がありうるというマルサスの主張を完全に認めていることを告げている³⁶⁾。

マルサスの関心は投資が貯蓄を下回らないように、資本家の投資誘引を常に高めることに注がれた。彼は、資本家の投資意欲は利潤率に大きく依存するものであると考え、富の増大にともなって利潤率を低下させないためには、不生産的消費も比例して増加しなくてはならないと主張する。不生産的消費は労働者を不生産的な目的のために雇用するので、労働需要も拡大する。従って、資本と労働の完全利用をともなった継続的な経済発展のためには、不生産的消費が必要不可欠であるということになる。マルサスは、この種の支出を行う役割を果たすのが地主階級であると考え、そして、地主階級による不生産的消費が不足する場合には、政府が代わってこれを行ない、過剰貯蓄を解消し、過剰蓄積を阻止しなくてはならない、と論じたのであった³⁷⁾。

以上のシスモンディとマルサスの販路説批判は、次のように図式化して要約できるであろう。

シスモンディ：年生産物 \neq 年所得 $=$ 年支出

マルサス：年生産物 $=$ 年所得 \neq 年支出

シスモンディは、年生産物と年所得とを同一視し、そこから不生産的消費の拡大の必要性を説くマルサスの議論を、自己の理論と同じものとは見なさない。彼は『経済学研究』の中で次のように述べる。

「彼（マルサス）は、消費が生産の結果でなければならないとは限らない、ということをや非常によく知っていた。彼は、生産活動が生産者自身の破滅になるような、市場の梗塞がありうることを洞察した。しかしながら、彼そして彼が出発した学派のすべては、富の主要原因は、常により大きく、そして常により速く生産することであり、諸国民は全力をあげて工業を促進しなくてはならない、ということを確認していた。そして彼は、消費を促進することもまた同様に重要であり、富者は蓄積される富を迅速に消費

36) Sraffa [35], Vol. VIII, p. 260.

37) Malthus [17], 初版, p. 511.

する義務をもち、富者の奢侈ならびに政府の浪費は、生きるために労働しなければならない者に対する有益な行為である、といういささか奇妙な結論に到達したのであった。」³⁸⁾

われわれは、マルサスの販路説批判の論理形式とシスモンディのそれが全く異なるものである、と結論できる。マルサスは、生産と所得を同一視し、成長経済において所得が常に全て支出されるような支出構造、すなわち蓄積のための支出と不生産的支出の比率を求めようとしたのである。従って、彼の販路説批判は、経済の成長とともに支出されない所得が発生するかもしれないという論点に絞られ、そこから彼の供給過剰論が導かれるのである。マルサスは、その対策として地主と政府による不生産的支出の増大を要請したのであった。このようなマルサスの不況対策はケインズの救済策に近いと言える³⁹⁾。

これに対して、シスモンディの販路説批判は、年所得は年生産物によって決定されるものではない、という論点に絞られる。シスモンディは、年生産物がそのまま年所得になるのは原始的な孤立人の経済において言えることであり、社会的分業と交換の発達した資本制経済においては、あてはまるものではないと考える⁴⁰⁾。彼は、今年度の所得は、過去の販売の成果から得られた利潤所得や、将来の利潤を期待して支払われる労働所得から成り、それは過去と未来の再生産の体系から切り放して考えることはできないと論じる。シスモンディの生産過剰論あるいは恐慌論は、体系の連鎖が断ち切られることによって資本制経済が崩壊する可能性について論じられたものである。そして彼が国家の介入を要請したことは、そのような災厄から労働者を保護するための法的処置であり、決してケインズの公共支出を要請したのではない⁴¹⁾。

38) Sismondi [30], Vol. I, p. 43.

39) ただし、マルサスが不況対策として、貨幣賃金率の切り下げを主張したこと、政府による投資と消費を区別し、生産力効果が現れる後者に反対したことなどは、ケインズの政策と異なる点である。

40) Sismondi [27], 初版, Vol. I, pp. 60-75.

41) ただし、シスモンディは、政府があらゆる消費者の中で最も裕福であり、顧客になるということだけで、産業を活気づけることも認めている。*Ibid.*, Vol. II, pp. 436-437. を見よ。

資本主義経済における経済変動が、直接的には資本家の投資によって引き起こされ、資本家の投資意欲は利潤率に影響を受け、利潤率は生産物の需要と供給に依存するという、そして経済の変動が雇用水準と賃金率を変動させ、労働者の福祉と人口成長を規制するという点に関して、シスモンディとマルサスがとった議論の筋道は類似していたと言ってもよい。しかしながら、それらを論証する場合に彼らが掲げる理論は、全く異なったものである。それは、単に形式上の相違にとどまらず、資本制経済に対してとる彼らの立場の根本的な相違の現れであると考えられる。

V 結 語

本稿は、シスモンディとマルサスの議論を、人口論、機械論、供給過剰論などの観点から比較した。人口成長に関して、彼らは、労働人口の増加を規制するのは労働需要であることを認める。しかしながら、マルサスは、より長期的に、そしてより根本的に人口成長を制限するのは獲得可能な食糧と人口の比率であるという考え方を固持した。シスモンディは、この命題が根拠のないものであり、政治経済学の基礎とは到底なりえないと批判した。彼ら自身の論争には明示的には取りあげられなかったものの、この見解の相違は、両者が、各々の置かれた経済的環境の中で、農業部門における収穫過剰をどのくらい深刻に受けとめていたかによるものである、と考えることができる⁴²⁾。しかしながら、人口法則に関する論争は、彼らの現実に対する接近方法自体の相違によって引き起こされたと見る方が、より興味深いかもしれない。シスモンディとマルサスはともに経済学者であっただけでなく歴史の研究者でもあった⁴³⁾。けれども、

42) マルサスがシスモンディに宛てた手紙の最後の箇所は、この点を暗示する。

「イタリアの経済には私に理解できない部分がひとつあります。非常に多くの農場が生産高の半分で貸し出されているというのはどうしてでしょうか。肥沃度は大幅に違っているに違いないのに。生産高の半分というのは、豊かな土地からなら容易に払われるかもしれませんが、やせた土地から払うのは不可能なように思われますが。」(Sraffa [35], Vol. VIII, p. 377.)

43) シスモンディは中世イタリア史とフランス史の膨大な著作を残している。一方、マルサスは東インド大学において歴史学の講座を担当したのであった。

マルサスの歴史に対する分析方法が『人口論』に見られるように、数量的な分析を多く含むものであったのに対し、シスモンディの方法は、数量的なものよりも、むしろ土地の所有形態や生産様式の変遷など制度的な分析に集中しているように思われる⁴⁴⁾。このような違いは、人口問題に関してだけではなく、資本制経済をどのように捉えるかという根本的な問題にも影響しているのではないだろうか。

労働を節約する機械の導入に関しては、彼らは、微妙な点で議論の食い違いはあるものの、概して、相対的人口過剰と生産過剰の原因になりうることを認める。そして、彼らはともに、機械の導入によって労働需要が直接減少するというよりも、むしろそれによって拡大した生産物の販路が見い出せないために労働需要が減少することを懸念したのであった。しかしながら、リカードやセイの販路説を批判し、全般的供給過剰の可能性を議論する上でマルサスとシスモンディの論理は全く異なったものになる。マルサスの議論は所得と支出が等式で結ばれるかどうかに関わるものであるが、シスモンディの議論は、生産物とは独立である所得が、再生産の連鎖を継続させるような報酬を生産者に与え続けるかどうかに関わるものであった。

以上の分析から、シスモンディとマルサスは、リカードやセイを批判した過少消費説の論者として同一視することは決してできない、と結論される。シスモンディの立場から見れば、マルサスは自分と同じ立場に立って英国の主流経済学を批判しているのではなく、むしろ英国の主流経済学派の中であって、それを補完しているのである。事実、マルサスとリカードの経済学は人口論や地代論などの共有財産をもっている。リカードの経済学が長期的な均衡状態を示すものであるのに対し、マルサスの経済学は均衡状態に到るまでの調整過程についての短期的な議論であると見なすこともできる⁴⁵⁾。これに対し、シスモン

44) 例えば、『新原理』の第3編「土地の富について」は、ほとんどが土地所有制度の史的分析にあてられている。

45) リカードはマルサスとの議論の相違をこのような視点で捉えた。*Ibid.*, Vol. VII, p. 120. を見よ。

ディの経済学は、リカード経済学との妥協を一切許さず、経済の予定調和を論証するための諸命題をことごとく否定したのであった。そこには、資本制経済を、変遷する経済体制における過渡的なそして不調和を内包した一制度として洞察するシスモンディの姿勢がうかがわれるように思われる。

参考文献

- [1] Arena, R. "Réflexions sur l'Analyse Sismondienne de la Formation des Prix." *Revue Economique*, n° 1, janvier, 1982.
- [2] Costabile, L. and Rowthorn, R. "Malthus's Theory of Wages and Growth." *Economic Journal*, Vol. 95, June, 1985.
- [3] Corry, B. "Malthus and Keynes—A reconsideration." *Economic Journal*, Vol. 69, December, 1959.
- [4] Corry, B. *Money, Saving and Investment in English Economics*. Macmillan, 1962.
- [5] Eltis, W. "Malthus's Theory of Effective Demand and Growth." *Oxford Economic Papers*, March, 1980.
- [6] Grossman, H. "Simonde de Sismondi et ses théories économiques." *Varsoviae*, 1924. (「シスモンディの経済理論」, 吉田静一訳, 神奈川大学『商経論叢』, 10巻1号, 3, 4号, 1974-1975.)
- [7] Hollander, S. "Malthus and Keynes: a Note." *Economic Journal*, Vol. 72, June, 1962.
- [8] Hollander, S. "Malthus and Post-Napoleonic Depression." *History of Political Economy*, Vol. 1, Fall, 1969.
- [9] Keynes, J. M. "Thomas Robert Malthus: the First Cambridge Economist." *Essays in Biography*, 1933.
- [10] Keynes, J. M. "Some Economic Consequences of a Declining Population." *Eugenics Review*, Vol. 29, no. 1, 1937.
- [11] Lange, O. "The Rate of Interest and the Optimum Propensity to Consume." *Economica*, February, 1938.
- [12] Link, R. *English Theory of Economic Fluctuation 1815-1848*. Columbia, N. Y., 1959.
- [13] Luftalla, M. "Sismondi Critique de la loi des débouchés." *Revue Economique*, t. 18, n° 6, 1967.

- [14] Luxemburg, R. *Die Akkumulation des Kapitals*. Berlin, 1913. (『資本蓄積論』, 長谷川文雄訳, 青木書店, 1952-5.)
- [15] Malthus, T. R. *An Essay on the Principle of Population*. 1st edn. 1798, 2nd edn. 1803, 3rd edn. 1806, 4th edn. 1807, 5th edn. 1817, 6th edn. 1826. ((初版)『人口の原理』, 高野岩三郎・大内兵衛訳, 岩波書店, 1962.)
- [16] Malthus, T. R. "A Summary View of the Principle of Population," *Encyclopedia Britannica*, 1830. (『マルサス人口論綱要』, 小林時三朗訳, 1959.)
- [17] Malthus, T. R. *Principles of Political Economy*. 1st edn. 1820, 2nd edn. 1836. (『経済学原理』, 小林時三朗訳, 岩波書店, 1963.)
- [18] Marx, K. *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* [1857-8]. Berlin, 1953. (『経済学批判要綱』, 高木幸二郎監訳, 大月書店, 1958-65.)
- [19] Marx, K. *Zur Kritik der politischen Ökonomie*. Berlin, 1859. (『経済学批判』, 杉本俊朗訳, 『マルクス・エンゲルス全集』第13巻, 1964.)
- [20] Marx, K. *Theorien über den Mehrwert* [1861-3], Berlin, Dietz, 1956-62. (『剰余価値学説史』, 時永淑朗訳, 『全集』第26巻 I-III, 1969-70.)
- [21] Meek, R. L. "Physiocracy and Early Theories of Under-Consumption." *Economica*, Vol. 18, August, 1951.
- [22] McCulloch, J. R. "The Opinions of Messers Say, Sismondi, and Malthus on the Effects of Machinery and Accumulation, Stated and Examined." *Edinburgh Review*, vol. XXXV, 1821. (『マカロックの機械論』, 相見志朗訳, 『経済学論叢』, 第19巻, 第1号, 1970.)
- [23] Paglin, M. *Malthus and Lauderdale: the Anti-Ricardian Tradition*. Kelly, N. Y., 1961.
- [24] Parguez, A. "Un essai de théorie générale de la croissance: les modèles sismondiennes d'accumulation." *Economie et Sociétés*, t. 10, n° 6, 1976.
- [25] Robbins, L. "Malthus as an Economist." *Economic Journal*, Vol. 77, June, 1967.
- [26] Robbins, L. *The Theory of Economic Development in the History of Economic Thought*. Macmillan, 1968. (『経済発展の学説』, 井手口一夫・伊藤正則訳, 東洋経済新報社, 1971.)
- [27] Sismondi, J. C. L. *Nouveaux Principes d'Economie Politique*. 1 éd. 1819, 2 éd. 1827. (『シスモンディ『経済学新原理』』, 吉田静一訳, 神奈川大学『商経論叢』, 11巻3, 4号-12巻4号, 1975-1977.)
- [28] Sismondi, J. C. L. "Examen de cette question: Le pouvoir de consommer s'accroît-il toujours dans la sociétés avec le pouvoir de produire?" *Annals de*

Legislation et de Jurisprudence, t.1, Geneve, 1820. (Repris dans 2 éd. des *Nouveaux principes d'économie politique*, 1827.) 「生産と消費のバランスについて——リカード氏の入門弟に反論する」, 斎藤佳信訳, 平瀬巳之吉編『経済学・歴史と現代』, 時潮社, 1974.)

- [29] Sismondi, J. C. L. "Sur la balance de consommations avec les productions." *Revue encyclopédique*, t. 22, 1824. (Repris dans 2 éd. des *Nouveaux principes d'économie politique*, 1827.)
- [30] Sismondi, J. C. L. *Etudes sur l'Economie Politique I-II*, 1837-1838.
- [31] Sowell, T. "The General Glut Controversy Reconsidered." *Oxford Economic Papers*, Vol. 15, November, 1963.
- [32] Sowell, T. "Sismondi, A Neglected Pioneer." *History of Political Economy*. Vol. 4, No. 1, 1972.
- [33] Sowell, T. *Classical Economics Reconsidered*. Princeton University Press, 1974.
- [34] Spengler, J. "Malthus's Total Population Theory: a Restatement and Re-appraisal." *Canadian Journal of Economics and Political Science*, February, May, 1945.
- [35] Sraffa, P. (ed.) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. VI-IX. Cambridge University Press, 1951-1973. (『リカード全集』第IV巻-第IX巻, 中野正監訳, 雄松堂書店, 1970-75.)
- [36] 大村照夫『マルサス研究』ミネルヴァ書房, 1985年。
- [37] 堂目卓生「シスモンディの経済学——マクロ動学による分析」『経済論叢』, 第141巻, 第2・3号, 1988年。
- [38] 堂目卓生「マルサスの有効需要論と資本蓄積論」『経済論叢』, 第142巻, 第5・6号, 1988年。
- [39] 堂目卓生「技術変化, 資本蓄積および雇用——シスモンディ経済表の理論的分析」『経済評論』, 第37巻, 第11号, 1988年。
- [40] 吉田静一『フランス古典経済学研究』有斐閣, 1982年。